
夏の願い（仮）

ほりり

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夏の願い（仮）

【Nコード】

N0482L

【作者名】

ほりり

【あらすじ】

少年と寝たきりだった兄とのひと夏の思い出。

初めて話す兄はあまりにも幼く、自分を弟と認識していなかった。

プロローグ

いま、お母さんのおなかの中には、ぼくのおとうとがいます。

まいにちお母さんに「おとうとがいい！おとうとがいい！」「っっておねがいしたら

かみさまが、ぼくのおねがい聞いてくれたんだっっておかあさんが、おしえてくれました

かみさまありがとう。これからはちゃんとすききらいしないできのこともたべます。

ぼくは、おとうとができたらいっしょにいろいろなことがしたいと思います。

いっばいいいっしょにお絵かきしたいです。

きらいなおべんきょうもいっしょにがんばります。

でもぼくのほうがおにいちゃんだから、

いっばいえばりったりもしたいです、

おにいちゃんのところにいっしょにあそびにいたりします。

あ、そうだ。あそこにもつれて行ってあげよう。

一年生になってはじめていったえんそくのばしょだ。

きめた。おとうとがうまれたら、おとうさんにおねがいして。

つれていってもらおう。

きつと、なつやすみの前にはあえるんだって。

はやくうまれてきてね。

おにいちゃんといっしょにいっしょね

く真のなつやすみ

ああ、今日はなんてすばらしい日なのだろう。

「亮太。本当に大丈夫でしょうね。お母さんたちそろそろいくわよ。」

「余計な心配はご無用だ。なんていったって今日からオレのフリーダムになるのだから!!」

「大丈夫だよ。10日間くらいちゃんと留守番できるって。ちゃんと冷食とかレトルトとかいっぱいそろえてくれたじゃん。いざとなったら料理もするし。しんぱいごむよーだって。」

「いざとなったらじゃなくて、基本は自分で料理しなさいよ。レトルトは保険なんだから。」

母さんよ。中学一年生男子がなつやすみの貴重な両親のいない時間を料理なんかでつぶすとお思いか。

「はいはい。がんばりますってば〜」

「もう。しっかりしてよ。やっぱりこの旅行断ったほうがよかったかしら・・・。」

「なにいつてんだ!!せつかく懸賞であてたんだろ?10泊も海外旅行ペアがタダでいけるなんて。こんなにおいしいことないんだってば」

冗談じゃない。太一たちと、どっちが早くクリアできるか競争してるんだ。両親がいなければ、夜更かししほうだいじゃないか。今になって断られたらこれまで宿題の合間でやってた手前まけてしまう!否!それは絶対避けなければ!

なんのためにこの日のために我慢して宿題をやったと思ってるんだ!

「母さんも父さんもさ。いつも恵太の世話してるからさ。ゆっくり楽しんできなつて。世話ならオレがちゃんとやっつくからさ。恵太だって絶対母さんにゆっくりしてもらいたいって思ってるよ」

くらえ！必殺恵太攻め！

「かあさん。そうだよ。君はいつもいろいろがんばってるんだ。この旅行は恵太からのプレゼントかもしれないよ。ゆっくり楽しもうな」

父さん！ナイスアシスト！

「ん〜・・・。そうね。よし！二人の分までしっかりと楽しんでくるわ。」

「おう！いつてらっしゃい！」

よし！来た！オレのフリーダムが！

「あんまりゲームばかりして夜更かしちゃだめよ。おなかも冷やさないように！じゃあいくわね。」

さすが母親。オレの考えなどお見通しですか。

長々とオレに釘をさしてやっと両親は門を閉じてタクシーに乗ってくれた。

「いつてらっしゃい〜！」

おれはにこやかな表情で両親を見送った。

両親がいなくて寂しいとかそういう年でももうない。まあ、初めての林間学校では泣いたけど。それは忘れる方向で。

心配そうな目でこちらを見る母とその母に「大丈夫だ」と肩をなでる父を乗せて。タクシーは空港へと出発した。

いつてらっしゃい母さん父さん。そして、おいでませ我が楽園！オレは意気揚々と門を閉じ自室にあるゲーム機へと向かうのであった。

くおはよう

両親の見送りも終わって。これからすることといたら
もはやゲームしかないだろう！

さっそくオレは自室に戻り自分の9インチの小さい豆テレビ（とオレは呼んでいる）からゲーム機を取り外す作業に取り掛かった。
別に自室でやってもなんら問題はないのだが。この豆テレビでやると目が疲れる。グラフィックスの細かいところが見れない。なによりも、敵を倒しているのに爽快感がまったくないという3点揃ったすばらしいテレビだ。
ある意味いつもゲームやってるのがこのテレビだったからこそ「ゲームは一日1時間」という過酷なルールも乗り切れたのかもしれない。

これから移動しようとしているリビングには去年買ったばかりの大きい、確か・・・40型だったか・・・な。よく覚えてないけど、とにかく大きくて、映りの綺麗な液晶テレビがある。
正月のとき、あっちのテレビで3時間だけゲームをしたことがあったけど。ゲームが違っじゃねえか！？っていうくらい画質の差にびっくりしたのを鮮明に覚えている。

と、考えているうちに最後のコードをひき抜いた。

さて、行くつか。両手いっぱいゲームとゲーム機、枕やらを抱えてのろのろとリビングに向かい、セッティングを開始する。こういうとき家のテレビはビデオデッキとかあんまり繋いでないから助かる。

よし。コレでOK。電源ぽちり。

うんうん。映りもいいな。さすが新しいテレビだ。

ソファにすわりコントローラーを手に取るうとしたとき、脱衣所のほうからうるさいアラームが聞こえてきた。

……洗濯機だ。

なんで、なんで出かけるのに洗濯機かけていくんだよ！

ああ、めんどくさい。

でも今放っておいたらオレ絶対夜まで何もしないよな。夜になったら洗濯物干しちゃダメだっていったから夜になっても干さないだろうな。

明日になったら洗濯物の存在自体を忘れていそうだ。

……帰ってくるころには確実にカビてるだろうな……。

あ、そういえば、洗濯物に制服もつつこんどいたんだ。一度カビた制服を着るのか……？ううむ。それは御免被りたい。と、なるとやるしかないよな。

渋々洗濯機に洗濯物を取り出し干しにかかる。

うう……リビングから聞こえるゲームのオープニングがオレを誘っている！

まあ。でもゲーム途中だったらもっとむかついたかもな……。シャツやズボンを干しながら、冷静に考えてみると。

ゲームの邪魔になる要因をいまのうちに排除してしまえばいいんじゃないのだろうか、と思えてきた。

邪魔になりそうなもの……。

うーん。掃除？いや、これは昨日やったしOKだ。

洗濯・・・は今やってるな。

食事はインスタント使うから時間はとられないだろう。

じゃ、時間とられそうなもの・・・。と考えると、思いつくものがひとつあった。

恵太だ。

恵太というのはオレの、一応兄貴にあたるヤツだ。

一応というのは・・・おれの兄貴はオレが生まれてすぐに交通事故故にあってしまって以来今日までずーっと昏睡状態なわけで。

おれにとって恵太が兄貴というのは教えられているけど。オレにとっては話もしたことがないわけで。

全然兄貴とも思えないのである。ひどいといわれるかもしれないけれど

オレにとつては置物のような存在に近いかもしれない。

現在恵太は自宅（まじこま）で点滴（詳しくは違うらしいんだけど、オレにとっちゃいつしよにしか思えない）で一日2回の栄養補給してすやすや寝てらっしゃる。

恵太の世話っていうのはソレのことである。

洗濯物を干し終え。さっさと恵太のごはん（なんだろうな）のパックを冷蔵庫から取り出し。さっさと取り替えて来てしまおうとチューブの先を消毒しながら恵太の部屋に向かう

「恵太くめしだつぞ〜」

まあ聞こえてるわけないけど。俺は犬にご飯でもあげる気持ちで恵太の部屋のドアを開けた。

でも。オレの目に入ったのはいつものように寝続ける恵太の姿ではなかった。

「う……おにいちゃん……だれ？」

眠たげに眼をこすりながらベッドに恵太は 座って いた。

おれは予想外のアクシデントにただただ硬直するのであった。

くはじまりく

困った。

おれは今激しく困っている。

困っているのをむりやりごまかしながら（こつこつのを現実逃避っ
ていうんだっけ）ゲームをしている。

「ねえねえ、このこはだあれ？」

ああ、うるさい。オレの精神安定を壊す元凶め。

「あー、爆発したー。」

だめだ。集中できない。というか、こいつうるさい。
なんでこんなことになってしまったんだ。

変わってしまったのは10分前だ。

10分前まではいつもの平和な前田家だったはずだ。

今から10分前、オレが生まれてからずくずくずと昏睡状態だっ
た兄、恵太が目を覚ました。

こつこつと大変めでたいことだが。

初対面（いや、寝顔は毎日みてるけどさ）のやつが目覚めたからっ
て世話の仕方なんかわかるわけがない。

とりあえず冷静に考えて、今すべきこと………。

母さんたちに連絡！

オレは急いで電話に向かい母の携帯電話に電話をかけた。まだ飛行機にはのってないはず！頼む！でくれかあさん！

「おかけになった電話は現在電波の届かないところにおられるか、電源が入っておりません。もういちど・・・」

なななな！なんだってー！！冗談じゃない！今すぐ連絡取れないとまずいんだってー！！両親のいないゆつくりとした夏休みは惜しいがコレの面倒とかどうすりゃいいんだよおおお！！助けてかあさんー！！

ガチャガチャと電話をいじるオレの洋服のはじがクイとひっぱられた。

「おにいちゃんだあれ？・・・あれえ・・・おかあさんどこ・・・？」

振り返ると恵太がオレの洋服の端をくいくいとひっぱってオレの方をじいゝとみていた。

「いや、ダレって言われても。オレ・・・アンタの弟なんですけど。」

そう答えるしかないだろう。ソレが事実だし・・・。

「う？おとーと？」

あ、やっぱり理解しないよねー。恵太寝てたもんねー。

オレは「うー？」とか「ぬおー？」とかよくわからん奇声を発する恵太を無視してもう一度母と父の携帯に電話をかけた。

「おかけになった・・・」

くそう！

どうすればいいんだ。あ、先生。先生ならどうすればいいか教えてください。くれるに違いない！

先生とは恵太が昏睡状態になってからずっと往診に来てもらってたお医者さんのことだ。毎月毎月来てくれて、前にオレが風邪とかひいたときも何度かお世話になっている。

うん。もちは餅屋っていうしな！

相変わらず恵太は不思議そうな目でこちらを見ている。（恵太からしたら）自宅に見知らぬ少年がいるのに騒がないとは警戒心のない

やつだな。

電話のよこにおいてあるアドレスブック（とは名ばかりの名詞とかをつつこんだりはりつけたりしてある手帳）をめくり病院の電話番号を探し出した。

「恵太の弟は亮太だよ。んとね。一昨日うまれたばつかなんだよ！」

「へえ・・・オレは生後3日ですか・・・しかもそんな特上の笑みで。ここでオレがその亮太だといっても絶対理解しないだろうーな。オレは恵太のすつとぼけた回答を無視して病院に連絡を取った。」

「お電話ありがとうございます。坂本医院です。」

「先生！オレです。前田です。前田亮太です！あの、恵太が！」

「ただいまお盆期間中は診療を休止させていただいております。次回の診察は20日となっております」

「うげ！！うそ！」

20日つてうあ10日以上先じゃんか！なんでそんなに・・・あ、そういえば先生この前来た時、お盆は家族で海外旅行に行くので怪我や病気なんかはしちやだめですよつていったたような・・・

「ねえ、おにいちゃんだーれ？おかあさんは？おとうさんは？」

次にどこにかければいいのかわからないとなると・・・やっぱこのまま無視は・・・ムリだよな・・・ホラ・・・オレっていいやつだから。ほつとくと心が痛むっつーか。いやさっきまでの無視でも痛んでましたよ。ほんとですつて。

「えーと・・・」

どう答えたらいいんだろ・・・

「おかあさんは病院かなあ・・・？」

あ、そうだこいつの中ではオレは生まれてきたばつかなんだ。つてことは母さんは病院にいるつてことで片付けておけばいいよな。父さんはその付き合いということにでもすればいいんじゃない？

うむ。われながら名案だ。

「あーつとね。お母さんはね今病院なんだー。早めに（希望）帰ってくると思うんだけどね。あ、お父さんはお母さんの付き添いで同じ病院にいるんだよー。いまはちょーつと連絡がね。つかないんだけどねー。」

N K教育テレビのおにいさんばりにやさしい口調でおれが答えると「ふえー……。そうなんだ。お母さん大丈夫かなあ……。」

「ん〜。大丈夫だとおもうよ〜」
だって本当はただの旅行だし

「そつかあ……。おにいちゃんはだあれ？」

あ、まずいソレを聞かれると……。
うーん。うーん。あ、そうだ。

「おにいちゃんはねー。お母さんたちがいない間、恵太のお世話をたのまれたんだー。えーと……。そうだな。従兄弟の亮太っていうんだよー。」

「えー。」
なんだよ。あからさまに不満そうだな。

しかたないだろ。母さんや先生に連絡つかないんだから。しかたなく面倒みてあげようという、オレのやさしさがわかんねえのかこいつは。

しかし……。つたないしゃべり方なのは中身が当時のままだからとして……。当時つてーと……。6歳か。でも外見的是20歳のはずだ。うん。オレより6つ上だからな。

しかし……。20歳のはずなのに、オレより2〜3cmくらいしか変わらないって……。オレが153センチだから、恵太つてチビなのか……。
（人のこと言えないとかは禁句な）

寝てるときはわかんなかったな。もつとでかいのかと。ああ、寝てるばっかりだったから成長しなかったのかもしれないなあ。腕もなまっちょろいし。ガリガリだし髪も長めだし。女みてー。

オレのサッカー部で小麦色になった肌とは対照的だ。多分オレのが

筋肉あるし……。髪の毛も丸坊主とはいわないけど短めでさわやか系だとオレは思う。

「じゃー。恵太はおにーちゃんと一緒にいなきやいけないの？」

いなきやいけないの。はこっちのセリフだと返してやりたい衝動に駆られたがここはオレのが（精神年齢的に）大人なのでこらえることにした。

「そっだよー。よろしくねー。はやくおかあさんに連絡つくといいねー（オレが）」

「……うん」

口をとんがらせながらしぶしぶという形でオレとの共同生活を了承してくれたらしい。

「とりあえず。顔あらっておいで。恵太」

「……うい！」

とたとたと恵太が洗面所に向かっていく姿をみてオレは……

現実逃避をして今に至ってるわけだ。

さて、これからオレはどうするべきなのだろう。

この日からオレと恵太との不思議で奇妙な共同生活が始まった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0482/>

夏の願い（仮）

2010年10月10日16時20分発行